

中学生・高校生が何故、プログラムに取り組む必要があるのか？

中学生・高校生にとってプログラムの必要性とは？

中学生、高校生という時期は、その発達段階から様々な価値観に触れ、自分自身のあり方や、生き方を深く考えていく時期である。この時期に重要なことは思考と行動を一致させ、行動や活動を通して物事を捉えていくことである。これを具体的にしたものが「プログラム」である。プログラムに従って「環境問題解決」の活動を展開することで子ども達は多くのことを学び、それを自分の経験として蓄え、環境に対する価値意識を高めることが可能である。

中学生・高校生にとってのプログラムのあり方とは？

■ 行動化に結びつく設定である

生徒が活動や学んだことを活用しながら、主体的に様々な機会の中で環境を捉えた活動に結びつける（行動化）ことができる。

■ 更新可能な継続的サイクルを設定である

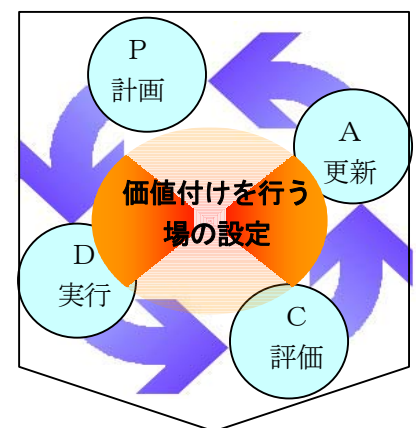
その場限りの活動で終わるプログラムではなく、継続可能で更新性のあるプログラムである必要があり、PDCAサイクルを重視する。

■ 価値付けを行える設定である

行動化が生徒に機能するために、活動の意味を捉え、その根幹となる環境問題を考えることで価値付けを行う場の設定を適宜行う

■ プログラムの成果に成就感をもたせる設定である

活動が内的な動機付けに支えられることが、活動を行動に結びつける要因であり、プログラム自体に成就感・達成感があることが求められる。



行動化

プログラムに取り組むにあたって

■ 教職員の意思統一を図ろう

意図を明確にして方向付けしたら、それを教職員、生徒の間で共有化していく必要がある。

■ 取り組みやすい部分から取組みを始めよう

自校ができる部分、取り組みやすい部分で計画を立て、成果と課題を明確にして次につなげる必要がある。

■ 系統的な位置付けを重視しよう

構成する分野、領域を系統的に捉え、その中での一定のスパンを考慮したプログラムが必要である。

■ 横断的・総合的な見方や考えかたを重視しよう

一つの領域にとどまらず、複数領域における横断的位置付けや、総合的位置付けをとらえる必要がある。

■ 集団で取り組む部分と、個が取り組む部分を明確にしよう

活動を仲間と協働的に行い、常に多角的、多面的に自分の思考を広げながら、評価をはたらかせ、自分自身が環境問題の本質を考えられるような展開に配慮する。

中学生・高校生にどのようなプログラムが考えられるのか？

重点としてとりあげる都市型の環境問題は札幌市に住む生徒が直面している問題であり、常に身近に捉えることができ、自分の行動が成果として捉えやすい。同時にそれが地球規模でどのように捉えられるのかという大きな価値付けを行うことができる。これを以下のように4つの視点から考えた事例を15事例検討し、本プログラムに載せた。また、その事例を基本的な視点とし、発展的な視点で捉える場合の考え方も以下に記載した。

身近なところから、まず始められ プログラム（基本的な方途）

■ 教科内のできるプログラム

各教科の中のカリキュラムとして位置づけることができるプログラムで取り組みやすい側面がある反面、その行動化を見取ることが難しい。また、各教科のカリキュラムを横断的に接続するなどの工夫で生徒の意識は高まる。

- ・社会科「ラスト5分で学べる環境問題」「自分もできるCO₂削減」「地球温暖化とエネルギーを考える」
- ・理科「みどりとふれあう理科学習」「樹木の吸収する二酸化炭素量を考える」
- ・理科・技術家庭科「発電実験を通して省エネを考える」
- ・理科（総合的な学習の時間でも活用可能）「札幌の水質について考えよう」「川の中の生きものたち」

■ 教科外のできるプログラム

教科外として以下に代表される、様々な領域が考えられるが、生徒の日常生活により根ざした取り組みであり、行動化に現れやすく、また、その成果も見取りやすい。PDCAのサイクルも構成しやすく、経年的、継続的な活動へと繋げることが容易である。また、総合的な時間の活用も重要である。

- ・総合的な学習の時間「ごみ問題を考えよう」「札幌の電気を考えよう」
- ・生徒会活動「給食用牛乳パックをリサイクルしよう」

■ 学校全体のできるプログラム

学校として取り組めるプログラムとは、学校全体の中で取り組むことで、生徒自身の意欲の向上が図れるものをさす。

- ・「環境教育のカリキュラムの作成」
- ・「Sapporo エコライフ実践校の取り組み」
- ・「学校祭のごみを減らそう」

■ イベント的に組まれるプログラム

環境教育を行動化に結びつけるためには、一人一人の小さな行動も総合されると非常に大きな成果に繋がることを実感として有する必要がある。イベントを活用し、学校間のネットワーク化を図ることで、その意識が生まれる。またネットワーク化を図る場合には、小規模の地域同士のかかわりから始めることで大きなつながりになる。

- ・「エコサミット in Sapporo！」

プログラムを深化させる ために（発展的な方途）

■ 教科内のできるプログラム

各教科様々な領域で可能であるが、単独教科だけではなく、複数教科が横断的に扱うことにより、有効に行動化に結び付けられる。特にカリキュラム編成の際に関連教科の題材配列を検討し、横断的に活用できる基礎的・基本的内容を位置付けることも重要である。

■ 教科外のできるプログラム

特に教科が意図して扱うには「総合的な学習の時間」「道徳・特別活動」等においても実施可能である。ただし、領域の特性を考慮し、関連性を重視する。総合や特別活動においては実践の場を設定し、道徳において価値付けを行うなどの配慮と関連付けが必要である。

■ 学校全体のできるプログラム

※環境目標や方針を学校独自に設定しながら、教育の柱を明確に持ち、学校版 ISO に見られる意識を拡大し、行動化に結びつける。また、その活動に保護者や地域と連携した取り組みも必要になる。

■ イベント的に組まれるプログラム

自校だけでは成果の捉えが弱い課題を近隣の小中学校とのかかわりで実践する。児童会や生徒会とのつながりを図りながら実践する。

実践例「リングプルの共同リサイクルに取組もう」「資源節約状況を近隣校で比べてみよう」「給食の残量調べとその対策を検討しよう」など